

虔十公園林

宮沢賢治

青空文庫

度十けんじふはいつも繩なはの帯をしめてわらって杜もりの中や畑の間をゆっくりあるいてゐるのでした。

雨の中の青い藪やぶを見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔かけて行く鷹たかを見付けてははねあがつて手をたゞいてみんなに知らせました。

けれどもあんまり子供らが度十をばかにして笑ふものですから度十はだんだん笑はないふりをするやうになりました。

風がどうと吹いてぶなの葉がチラチラ光るときなどは度十はもううれしくてうれしくてひとりで笑へて仕方ないので、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついでごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立ってゐるのでした。

時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒かゆいやうなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑ひました。

なるほど遠くから見ると度十は口の横わきを搔かいてゐるか或あるいは欠伸あくびでもしてゐるかのやうに見えましたが近くではもちろん笑つてゐる息の音も聞えましたし唇くちびるがピクピク動いてゐるのもわかりましたから子供らはやつぱりそれもばかにして笑ひました。

おつかさんに云ひつけられると度十は水を五百杯でも汲みました。一日一杯畑の草もとりました。けれども度十のおつかさんもおとうさんも仲々そんなことを度十に云ひつけようとはしませんでした。

さて、度十の家のうしろに丁度大きな運動場ぐらゐの野原がまだ畑にならないで残つてゐました。

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新らしい草も芽を出さない時、度十はいきなり田打ちをしてゐた家の人達の前に走つて来て云ひました。

「お母、おらさ杉苗七百本、買つて呉ろ。」

度十のおつかさんはきらきらの三本鋤を動かすのをやめてじつと度十の顔を見て云ひました。

「杉苗七百ど、どごさ植ゑらい。」

「家のうしろの野原さ。」

そのとき度十の兄さんが云ひました。

「度十、あそこは杉植ゑでも成長らない処だ。それより少し田でも打つて助ける。」

度十はきまり悪さうにもぢもぢして下を向いてしまひました。

すると度十のお父さんが向ふで汗を拭きながらからだを延ばして

「買ってやれ、買ってやれ。度十あ今まで何一つだて頼んだごとあ無いがったもの。買ってやれ。」と云ひましたので度十のお母さんも安心したやうに笑ひました。

度十はまるでよろこんですぐにまっすぐに家の方へ走りしました。

そして納屋から唐鋏たうくはを持ち出してぼくりぼくりと芝を起して杉苗を植ゑる穴を掘りはじめました。

度十の兄さんがあとを追つて来てそれを見て云ひました。

「度十、杉あ植る時、掘らないばわがないんだぢや。明日まで待て。おれ、苗買って来てやるがら。」

度十はきまり悪さうに鋏くはを置きました。

次の日、空はよく晴れて山の雪はまっ白に光りひばりは高く高くのぼってチーチクチーチクやりました。そして度十はまるでこらへ切れないやうににこにこ笑つて兄さんに教へられたやうに今度は北の方の塚さかひから杉苗の穴を掘りはじめました。実にまっすぐに実之間隔正しくそれを掘つたのでした。度十の兄さんがそこへ一本づつ苗を植ゑて行きました。

その時野原の北側に畑を有もつてゐる平二がきせるをくはへてふところ手をして寒さうに

肩をすぼめてやって来ました。平二は百姓も少しはしてゐましたが実はもつと別の、人にいやがられるやうなことも仕事にしてゐました。平二は度十に云ひました。

「やい。度十、此処ここさ杉植るなんてやつぱり馬鹿ばかだな。第一おらの畑あ日影にならな。」

度十は顔を赤くして何か云ひたさうにしましたが云へないでもちもぢしました。すると度十の兄さんが、

「平二さん、お早うがす。」と云つて向ふに立ちあがりましたので平二はぶつぶつ云ひながら又のつそりと向ふへ行つてしまひました。

その芝原へ杉を植ゑることを嘲笑わらつたものは決して平二だけではありませんでした。あんな処に杉など育つものでもない、底は硬い粘土なんだ、やつぱり馬鹿は馬鹿だとみんなが云つて居をりました。

それは全くその通りでした。杉は五年までは緑いろの心しんがまっすぐに空の方へ延びて行きましたがもうそれからはだんだん頭が円く變つて七年目も八年目もやつぱり丈が九尺ぐらゐでした。

ある朝度十が林の前に立つてゐますとひとりの百姓が冗談に云ひました。

「おゝい、度十。あの杉あ枝打ちささないのか。」

「枝打ちていふのは何だい。」

「枝打ちつのは下の方の枝山刀で落すのさ。」

「おらも枝打ちするべがな。」

度十は走って行って山刀を持って来ました。

そして片っぱしからぱちぱち杉の下枝を払ひはじめました。ところがたゞ九尺の杉ですから度十は少しからだをまげて杉の木の下にくぐらなければなりませんでした。

夕方になったときはどの木も上の方の枝をたゞ三四本ぐらゐづつ残してあとはすっかり払ひ落されてゐました。

濃い緑いろの枝はいちめんに下草を埋めその小さな林はあかるくがらんとなくなつてしまひました。

度十は一ぺんにあんまりがらんとしたのでなんだか気持ちが悪くて胸が痛いやうに思ひました。

そこへ丁度度十けんじふの兄さんが畑から帰ってやって来ました。が林を見て思はず笑ひました。そしてぼんやり立ってゐる度十にきげんよく云ひました。

「おう、枝集めべ、いゝ焚たぎものうんと出来だ。林も立派になつたな。」

そこで度十もやつと安心して兄さんと一緒に杉の木の下にくぐって落した枝をすつかり集めました。

下草はみじかくて奇麗でまるで仙人たちが碁ごでもうつつ処のやうに見えました。

ところが次の日度十は納屋で虫喰ひ大豆まめを拾ってゐましたら林の方でそれはそれほ大き
わぎが聞えました。

あつちでもこつちでも号令をかける声ラツパのまね、足ぶみの音それからまるでそこら
中の鳥も飛びあがるやうなどつと起るわらひ声、度十はびっくりしてそつちへ行つて見ま
した。

すると愕おどろいたことは学校帰りの子供らが五十人も集つて一列になつて歩調をそろへて
その杉の木の間を行進してゐるのでした。

全く杉の列はどこを通つても並木道のやうでした。それに青い服を着たやうな杉の木の
方も列を組んであるいてゐるやうに見えるのですから子供らのよろこび加減と云つたらと
てもありません、みんな顔をまつ赤にしてもずのやうに叫んで杉の列の間を歩いてゐるの
でした。

その杉の列には、東京街道口シヤ街道それから西洋街道といふやうにずんずん名前がつ

いて行きました。

度十もよろこんで杉のこつちにかくれながら口を大きくあいてはあはあ笑ひました。

それからはもう毎日毎日子供らが集まりました。

たゞ子供らの来ないのは雨の日でした。

その日はまっ白なやはらかな空からあめのさらさらと降る中で度十がたゞ一人からだ中ずぶぬれになつて林の外に立つてゐました。

「度十さん。今日も林の立番だなす。」

蓑みのを着て通りかゝる人が笑つて云ひました。その杉には鳶とび色の実がなり立派な緑の枝さきからはすきとほつたつめたい雨のしづくがポタリポタリと垂れました。度十は口を大きくあけてはあはあ息をつきからだからは雨の中に湯気を立てながらいつまでもいつまでもそこに立つてゐるのでした。

ところがあつ霧のふかい朝でした。

度十は萱場かやばで平二といきなり行き会ひました。

平二はまはりをよく見まはしてからまるで狼おほかみのやうないやな顔をしてどなりました。

「度十、貴さんどこの杉伐きれ。」

「何してな。」

「おらの畑あ日かげにならな。」

度十はだまつて下を向きました。平二の畑が日かげになると云つたつて杉の影がたかで五寸もはひつてはゐるなかつたのです。おまけに杉はとにかく南から来る強い風を防いでゐるのでした。

「伐れ、伐れ。伐らないが。」

「伐らない。」度十が顔をあげて少し怖さうに云ひました。その唇はいまにも泣き出しさうにひきつつてゐました。実にこれが度十の一生の間のたった一つの人に対する逆らひの言だつたのです。

ところが平二は人のいゝ度十などにばかにされたと思つたので急に怒り出して肩を張つたと思ふといきなり度十の頬をなぐりつけました。どしりどしりとなぐりつけました。

度十は手を頬にあてながら黙つてなぐられてゐましたがたうとうまはりがみんなまつ青に見えてよろよろしてしまひました。すると平二も少し気味が悪くなつたと見えて急いで腕を組んでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまひました。

さて度十はその秋チブスにかかつて死にました。平二も丁度その十日ばかり前にやっぱ

りその病気で死んでゐました。

ところがそんなことには一向構はず林にはやはり毎日毎日子供らが集まりました。

お話はずんずん急ぎます。

次の年その村に鉄道が通り度十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰つぶれて家たちりました。いつかすつかり町になつてしまつたのです。その中に度十の林だけはどうか云ふわけかそのまゝ残つて居りました。その杉もやつと一丈ぐらゐ、子供らは毎日毎日集まりました。学校がすぐ近くに建つてゐましたから子供らはその林と林の南の芝原をいよいよ自分らの運動場の続きと思つてしまひました。

度十のお父さんももうかみがまつ白はずでした。まつ白な筈はずです。度十が死んでから二十年近くなるではありませんか。

ある日昔のその村から出て今アメリカのある大学の教授になつてゐる若い博士が十五年ぶりで故郷へ歸つて来ました。

どこに昔の畑や森のおもかげがあつたでせう。町の人たちも大ていは新らしく外から来た人たちでした。

それでもある日博士は小学校から頼まれてその講堂でみんなに向ふの国の話をしました。お話がすんでから博士は校長さんたちと運動場に出てそれからあの度十の林の方へ行きました。

すると若い博士は愕おどろいて何べんも眼鏡めがねを直してみましたがつうとう半分ひとりごとのやうに云ひました。

「あゝ、こゝはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ。木は却かへつて小さくなつたやうだ。みんなも遊んでゐる。あゝ、あの中に私や私の昔の友達が居ないだらうか。」

博士は俄にはかに気がついたやうに笑ひ顔になつて校長さんに云ひました。

「こゝは今は学校の運動場ですか。」

「いゝえ。こゝはこの向ふの家の地面なのですが家の人たちが一向かまはないで子供らの集まるまゝにして置くものですから、まるで学校の附属の運動場のやうになつてしまひましたが実はさうではありません。」

「それは不思議な方ですね、一体どう云ふわけでしょう。」

「こゝが町になつてからみんなで売れ売れと申したさうですが年よりの方がこゝは度十けんじふ

のたゞ一つのかたみだからいくら困つても、これをなくすることはどうしてもできないと答へるさうです。」

「ああさうさう、ありました、ありました。その虔十といふ人は少し足りないと思つてゐたのです。いつでもはあはあ笑つてゐる人でした。毎日丁度この辺に立つて私らの遊ぶのを見てゐたのです。この杉もみんなその人が植ゑたのださうです。あゝ全くたれがかしこくたれが賢くないかはわかりません。たゞどこまでも十じふりき力の作用は不思議です。こゝはもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうでせう。こゝに虔十公園林と名をつけていつまでもこの通り保存するやうにしては。」

「これは全くお考へつきです。さうなれば子供らもどんなにしあはせか知れません。」
 さてみんなその通りになりました。

芝生のまん中、子供らの林の前に

「虔十公園林」と彫つた青いかんらんがん橄欖岩の碑が建ちました。

昔のその学校の生徒、今はもう立派な検事になったり将校になったり海の向ふに小さいながら農園を有もつたりしてゐる人たちから沢山の手紙やお金が学校に集まって来ました。

虔十のうちの人たちはほんたうによるこんで泣きました。

全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さはやかな匂にほひ、夏のすゞしい陰、月光色の芝生がこれから何千人の人たちに本当のさいはひが何だかを教へるか数へられませんでした。そして林は度十の居た時の通り雨が降つてはすき徹とほる冷たい雫しづくをみじかい草にポタリポタリと落しお日さまが輝いては新らしい奇麗な空気をさはやかにはき出すのでした。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一卷」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2007年4月25日作成

2013年3月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

度十公園林

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>